

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第18回)

ご近所づきあい

3月に吉祥寺の劇場で翻訳上演するイギリスの現代劇『ザ・ダーク』は、まさにイギリスの生活感にあふれた物語だ。舞台は以前ここで紹介した典型的な「テラストハウス」の並びの3軒、そこにそれぞれ暮らす3つの家族が描かれるのだが、それを1軒分の舞台装置で演じて見せる。そっくりな間取りの家なので、例えて言えば、かつての日本の「文化住宅」の3軒の物語を1軒の中で演じている、と思ってもらえばイメージし易いかもしれない。

老母と中年の息子が暮らす家庭は、息子が幼児性愛者だと誤解されて、近所の人たちから白い目で見られている。赤ん坊のいる若い夫婦は、妻が帝王切開の産後のため肉体的にも精神的にも疲弊しており、夫は過剰に心配している。二人には昔、最初の子を幼くしてなくしたというトラウマがある。中年夫婦とティーンエイジャーの息子の家庭は、息子が引きこもってネット上の相手とはチャットで話すくせに両親とは半年も口をきいていない。それぞれの家庭が「闇」(=The Dark)を抱えているわけだ。ある夜、突然辺り一帯が停電になる。「すみません、蠟燭貸してもらえませんか？」などと互いの家庭を訪ねて行き、交流が始まり、それぞれの「闇」が闇の中で交差する。まさにタイトル通りの物語だ。

それにしても、停電になるまでは「近所の人の

半分は顔もわからない」というほど世帯間の交流がない、というのは、なんだか現代日本と変わらない光景のようにも思える。老母は言う。「昔はご近所がお互いの世話をやいたもんだ。Neighbourhood Watch Schemeなんて必要なかった…」この「ご近所警護計画」とは地域住民と警察や自治体が一体となって地域の保安を維持する制度のことだが、まあ、簡単に言うと住民の自警団によって犯罪防止に努めること、と考えていいだろう。逆に言えば、こうやって制度でも設けないと、犯罪者(昨今ではテロリストなども)が地域に潜伏してもわからないほどコミュニケーションが不足している、ということだ。

だが、そのような制度がなくても、本当はある程度保安は維持されている。コミュニケーション不足は、もとをただせば極端なまでのプライバシー重視の裏返しである。さらに、それはプライバシーを覗き見したいという欲求の裏返しでもある。文化人類学者K.フォックスはイギリス人のそういう性質を「curtain twitcher」と呼んだ。カーテンの端をつまみながらそっにご近所さんの様子を窺っている彼らは、無意識のうちに防犯に努めているわけだ。